西照

西照寺寺報「さいしょう」
第16号
2006年10月6日
発行　浄土真宗本願寺派　西照寺
高岡市吉久２丁目４－40

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講をお勤めいたします。
お参りくださいませ。

おつとめの時間

十月十五日（日）午後二時（逮夜）～
午後七時（初夜）～
十六日（月）午前九時（晨朝）～
午前九時半（満日中）～

布教使　十五日　山名一徳師（高岡市伏木龍善寺）
十六日　池内瑞雄師（新湊市中央町円徳寺）

西谷山　西照寺

善人ばかりの家庭

「善人ばかりの家庭は争いが絶えぬ」という言葉があります。善い人ばかりが集まっている家族ですから、さぞかし仲良くて楽しそうな家庭なんだろうと思ってしまいます。しかし、実際は善人ばかりが集まると喧嘩が絶えないというのです。

ここでいう「善人」とは、「自分は正しい」「百点だ」と思っている人のことを言うのでしょう。

私の好きな話に青柳田鶴子さんの「100点と0点」というがあります。

太郎君の家の隣りはBさんの家でした。太郎君のお父さんは会社員です。家には、お母さんとおばあさんと、小学生の太郎君の四人が住んでいます。Bさんもサラリーマンです。そして同じ様に四人家族でした。ほんとによく似た隣同志ですが、太郎君の家族はみんな「自分はダメ人間だナー、点数でいうと0点だナー」と思っているのです。Bさんの家の人たちはみんな「自分はしっかり者だ、点数でいうと100点の人間だ」と思っているのです。

今日も太郎君のお父さんは会社から帰って来ました。「ただいま」といって玄関に上がった拍子に、そこにおいてあった湯のみ茶碗にけつまづいたのです。ガチャン、湯のみはわれてしまいました。「アッしまった。よく見て上がればよかった。」と頭をかいているところへお母さんが飛んで来て「ごめんなさい。私がすぐに片付けておけばよかったのに」とあやまりました。飛び出して来た太郎君も「お父さんケガはなかった?」と心配しました。奥から出て来たおばあさんも「大丈夫かい、私が片付けておけばよかったものを、年がいもなくて」と、みんな自分が悪かったと思ってあやまり合いました。

同じ頃隣りのBさんも会社から帰って来ました。玄関には同じように湯のみ茶碗があったのです。Bさんもうっかり足にひっかけてガチャン!とわってしまいました。「だれだ、こんなところに湯のみを置いといたのは!」とどなっています。奥さんは「よく見て上がればいいでしょ」といいかえしました。おばあさんは「みんなボヤボヤしているからだよ、あの湯のみは高かったのに」とぐちをいいました。

同じ事件が起ったのに、太郎君の家ではケガのなかったことを喜んでニコニコと夕飯を食べましたが、Bさんの家の夕食はまずいものになりました。自分が100点と思っていると皆、人が悪い様に思えるのです。親鸞聖人は「自分は0点だ」とおっしゃったすばらしい方です。あなたは何点でしょう?

という話です。

自分は、正しくて間違いなんか犯すはずがないと思っている人は、他者を裁きの目で見たり、自分の非を他者に転嫁しがちになります。そこには、お互いの尊厳に出会い、心を通わせるという世界は開けてこないように思います。

親鸞聖人は、法然様の言葉をいただいて「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と云われています。仏さまに照らされるとみんな愚かな凡夫だったなあということです。

正しいことを主張しあうのは、大切なことです。ただ同時に私も相手と同じような罪を犯しかねない愚かな凡夫であったなあと目覚めていくところに、相手と通じ合える世界が開けてくるのではないでし

ようか。

須弥山の世界観

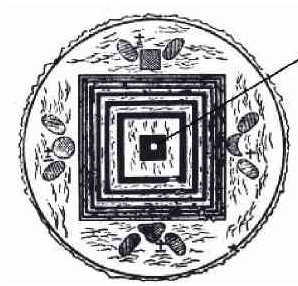
本願寺派のお坊さんなんですが、大阪に清岡隆文という先生がおられます。この方が北米・南米の開教区へ出かけられた時のことです。

これから北米などをまわるということで、大阪で世界地図を買いまして行く場所を確認した。そして、アメリカへ渡った際に、現地でも世界地図を買ってみたそうです。世界地図ならどこで買っても同じかと思っていたら、驚いたことに日本で買った世界地図とアメリカで買った世界地図は、言葉以上に根本的に違っていた。日本で買った世界地図は、日本が真ん中に描いてあり、アメリカで買った世界地図はアメリカが真ん中に描いてあった。それを見ながら先生は、私たちの世界観がよくそこに表われていると思ったとおっしゃっていました。

釈尊は、人間はどこまでも自分中心に考えるようにできていると云われます。自分を中心に置いて考え、自分が正しいと主張し合えば、自ずと争いになります。家庭から、国家間に至るまでそうでしょう。国家間の争いはみな互いに「正義の戦争」を主張します。

このような私たちの世界観のあり方に対して、仏教では須弥山説という世界観を示しています。

簡単に言うと、宇宙に風輪（ふうりん）という銀河系を貫くようは大きなお盆みたいなものが浮いている。その真ん中に高さ十六万由旬（今日の高さでいうと百十二万キロメートル程度）の山がそびえ立っていて、その上に仏様の世界が広がっている。そして、須弥山のふもとは、湖になっていて、四つの島が浮いている。その島に生きとし生けるものが住んでいるという世界観です。



なんだか幼稚な話に聞こえますが、これは何を伝えようとしているかというと、上から見るとよく分かります。真ん中には、仏さまの世界が開けています。生きとし生けるものは、周りから仏さまを拝むという図になります。

人間は、いつも自分は正しいと自分を中心に置いて考えようとします。みんながそうだから争いが絶えない。だから、大事な中心は仏さまに譲って、みんなが一歩下って周りから仏さまを拝み、私の真の姿を照らし出されていけば、みんな争うことがなく、互いに和み会う世界が開けていくということを現しているように思います。

お寺の本堂に安置されている阿弥陀様の台座を須弥壇といいます。仏教の須弥山説という世界観を現しています。みなさんのご家庭の仏壇の阿弥陀様の台座も須弥壇として形作られています。

仏の世界へ帰っていかれた亡き方々を偲びつつ、仏壇を拝む際には、阿弥陀様の台座の須弥壇は、仏教の世界観を私たちに訴えかけているのだと受け取りたいものです。（文責　住職）

真宗の行事　＜初参式＞

初参式とは、新しい生命の誕生をよろこび、生きることの意味を教え、真のよりどころとなってくださる阿弥陀如来の前で人生の出発をする式であります。

人間に生まれることの難しさについて、お釈迦さまはいろいろのたとえをもって説かれています。その生まれ難い人間に生まれ、人生の出発の時にあたり、真実の阿弥陀如来に遇うという、なによりのご縁をいただくことは、この上もない幸せであろうと思います。

人間に生まれながら、人間に生まれたことに何のよろこびももたず、かえって、人間に生まれたことを不平不満の種にして生きている人の多い時代であればあるほど人生の出発を真剣に考えなければなりません。

人生を力いっぱい生きるためになくてはならないものは何か、それは真のよりどころであります。真のよりどころをもたない人の人生には、常に不安がつきまとい、楽しみはあっても、人間に生まれてよかったという、腹の底からでてくる喜びはありません。

お釈迦様は、真のよりどころは「法」であると教えてくださいました。

親鸞聖人は、「法」は「南無阿弥陀仏」となって、一人ひとりの胸の底まで届いてくださると教えてくださいました。それ故に、如来の尊前での初参式は、子を思う親の真心の発露の式でもあります。　『み仏と共に』より

初参式　受式者募集のご案内

お子様の初めての寺参りを「初参式」といいます。尊いご縁によって恵まれた新しいいのちの誕生をよろこび、阿弥陀さまの御前にて、ご家族、また縁のある方々そろってお祝いし、感謝する儀式です。また、真の依りどころにたって、人生を力強く歩んでくれるようにと、願う式でもあります。

多数の皆様のご参加をお待ちいたします。　合掌

日時　十月二十九日（日）午前十時（法要の後、記念撮影）

場所　西照寺本堂

対象　小学校二年生まで

費用　二千五百円（初参式栞、子供用式章、念珠、写真代など）

募集締切　十月十五日

（当日の服装は自由です。大人の方で門徒式章や念珠をお持ちの方はご持参ください。）

詳しくは、〇七六六―八四―〇七〇五
西照寺までご連絡ください。